

## ドイツ語の性と中性名詞

尾 関 種 雄

### 1. ドイツ語の性

文法上の性〔Genus : Geschlecht〕の起源は元来人間及び動物の自然的性の区別をするという概念からスタートし、自然的性の区別のはっきりしないもの、特に無生物に対しては古代ゲルマン人の想像力により、万象を人格化あるいは擬人化したために性を有することとなったといわれている。これについて19世紀の言語学者であるJakob Grimmは「言語の空想力によって自然性を一切の対象の上に拡大したのが文法性である。この驚嘆すべき作業によって死んだ抽象的な概念を含むはずの多くの表現がいわば生命と感情を獲得したものである」と述べている。日本語の名詞に性をもたぬ事実からして、文法上の性の区別の必要性がないことを考え合わすと我々にとってはGrimm以上に驚嘆するところであり、その反面ドイツ語には何か「歴史」を感じるところでもある。

自然性には男性と女性の二つしかないがドイツ語にはいわゆる文法上の「中性」が存在するのである。前述の人格化作用に際し、言語の空想力によってもこの両性のいずれにも属させ得ない概念が多数存在するところからこれらの語を中性名詞とし、第三の性を与えたといえるし又男性でも女性でもない語に便宜上与えられたともいえる。この第三の性として、①生産されたもの、②集合的なもの、③一般的なもの、④物質的なもの、⑤未発達なものに対して与え中性名詞としたようである。このように最初は内容の上で自然の性の連想から名詞の性がきめられたのである。

その後言語の歴史の変遷により文法上の性も変化したのである。いわば文法上の性は昔から一定していたのでなく性の転換をしたものもある。これは時代の経過につれて想像力よりも智力がまさるようになり、言葉も直観性・感覚性より論理性や抽象性が重んぜられてくるにつれて自然の性への連想はうすれていった。そして後には単に語の形の類似とか語尾等の形式上から性が定まるようになった。また多くの単語にはただ一つの性を有するのであるが中には二つまたは三つの性を持つ語もあり、その場合には性が違うと意味や変化の違う語もあり、また性が二つあっても同じ意味、同じ変化をする語もある。同じ単語であり乍らここまで性が複雑化すると自然性との関連は全く薄れてくるのである。Weib, Fräulein, Mädchen といえは皆人間である女性に関する語でありながら中性名詞になっているのだから全く何をかいわんやである。この様に自然的性のスタートから発した文法上の性は語の発達に伴い、造語や派生語が作られたり外来語の導入等によって複雑化し、今日に於いては「人・物」そのものに性の概念が付帯しているとはいいい切れず

「語」そのものに性を有するものだと解釈に至った。

ドイツ語には男性 [Maskulium]、女性 [Femininum]、中性 [Neutrum] の三つがあるが性は語そのものに内在し変化によって生ずるのでないから、語尾変化の基礎とならず単にABCでもよさそうに思われる。実際に訳してみるときにも意識しなくてもすむのであり、男性名詞が出るたびに「男らしさ」を感じたり、女性名詞に「女らしさ」を感じずる事は少ない。しかしABCが全く同じかというと必ずしもそうとはいいい切れずわずかながらその様な感じがするという程度のものである。それならばドイツ語の性を全廃してしまえとの論拠も出てくるがそう簡単にはまいらぬ。18世紀の文法学者であGottsched は自分の時代のドイツ語が一番秀れた言語だと確信しており、数字のzwei〔2〕に於ける伝統的な区別であるzween(男性)・zwo(女性)・zwei(中性)を推奨していた。筆者がミュンヘン大学留学中にもドイツ人の口からよくzwoの発音を耳にしたことからいっても、Gottschedの感覚が今日のドイツ人にも生きてるといえそうだ。ドイツ語の性を無視出来ぬ点として更に云えることは名詞の性別がこれに附加する規定語・すなわち冠詞・形容詞・代名詞等にMotionを起こさせる働きがあるからである。文法性の起源である自然性は独立した実体にしか存在しない。従って文法性も本来は名詞にしか存在しないわけであるが、名詞の直接の代理者である人称代名詞は一部に性別を持っている。すなわちer・sie・es その他の代名詞は次に名詞が略された形をとる場合だけ性別を表わす、但しこれはMotionであって代名詞そのもののもつ性別ではない。dieser・diese・diesesもそのよい例である。

文法上の性の発達は国語によって異なる。例えばフランス語・イタリア語・スペイン語は男性と女性の二性しかない。独語はロシア語と同様に三性ある。サンスクリット語・ラテン語・ギリシヤ語を初め古い言葉には三性あり、歴史的に見れば三性あるのが本当のようであり、その事からすればドイツ語は古い歴史をそのままうけついでいるといえる。反対に英語では性の区別は一部にしか存在しない。例えばshipを代名詞で受けるとき女性とみなしてsheと表わす等はそのよい例である。英語の性も古代に於いては三性の区別があったが今日ではもはやはっきりしなくなった。ある種の名詞を代名詞で受ける場合にitかheかsheかをとるといった現象に見られる程度のものである。ドイツ語は両性に属さない名詞を相当数(中性)をもっているのと言わば仏英の中間だという学者もいる。

我々日本人にとってドイツ語の名詞の性を初めて憶える時には全く当惑してしまう。口が男性名詞(der Mund)・鼻が女性名詞(die Nase)・目が中性名詞(das Auge)等、元来性をもたぬ日本人にとって全く理解に苦しむところである。とはいえドイツ語を学ぶ者にとってはこの性を憶える必要があり而も極めて大切なことである。一見紛乱を極めていくような性でもこれを仔細に観察すると自ら一脈の規則が見い出されその習得が容易となる。しかるにこの様な点に留意して中性名詞に関してのみその見分け方といった事に焦点を合わせ以下論述することにする。

## 2. 語形に依る中性名詞の見分け方

### (1) —chen, —leinに終る縮少名詞全部

chenは古い—ichinから後者は—ilin(中高ド:—ele, —elin)から生じたもので、共に小さいことを表わす縮少詞である。また無力なこと憐れむべきこととか軽蔑的な意味が加えられることもある。尚i—音の影響で幹母音を起こさせるのが普通である。

Häuschen (←Haus) Röslein (←Rose)

Bäumchen (←Baum) Knäblein (←Knabe)

Mäuschen (←Maus) Blümlein (←Blume)

ドイツ語には元来chenだけを用いていたのだが、Lutherが聖書を翻訳する時に初めてleinを用い初めleinはchenよりも高尚壮麗な響きをもつものとされており、chenは低独・leinは高独の系統といわれている。だが実際は音声の関係で使い分けられる場合が多く、例えば—lに終わるものはleinをとり難いのでchenをとり—ch, —gに終るものは反対の理由で—leinをとるといった工合である。Ställchen, Büchleinといったものがそのよい例である。但し後者の場合でも中に縮少詞である—elを抽入してchenをとることもあり(縮小語尾の重複形となる)前者の場合でもlを含む尾音節を略してleinをとることもある。

Büchelchen Löchelchen Vögelein

次に「愛らしい」とか「優しい」とかいった愛称に用いられる場合があり、特に人を表わす名称に用いられるが自然性と一致しなくてもよい。

Väterchen Mütterchen Hänschen Fräulein

尚、中高ドの—eleから—elという縮少辞も生まれており多くは中性である。Mädel(←meid)がその例である。又縮少語尾leにはBriefle(←Brief)といったものもある。そして又Kaninchenのように縮少辞を除いた形が最早用いられなくなっているのも少数ある。

### (2) —nisで派生されたものの多数

—nisはゴート語の接尾辞であるassusが屢々んに終る語に附加して用いられた結果nassusという接尾辞と感ぜられることとなり古高ドのnessi(中性)とnissa(女性)が合流して生じたものが今日の—nisであり、中性の他に女性名詞をつくっている。行為又はその結果を示す名詞には中性となり、状態を示す名詞は女性となる。更に一語が中性と女性に用いられている。

das Ärgernis(憤慨の種)とdie Ärgernis(憤慨)

das Erkenntnis(判決)とdie Erkenntnis(認識)

das Erzeugnis das Gefängnis das Vermächtnis

das od. die Verderbnis(腐敗)

## (3) —sal, —selに終る名詞の大部分

古高ドの—salaから由来しsalの弱変化したのがselである。主として動詞（稀れに名詞・形容詞）から動作状態そのもの又はそれ等を惹起するものを表わす名詞をつくっている。

Irrsal (←irren) Scheusal Labsal

そして又動作の受動的な結果に関するものを表わすこともある。

Schicksal Rätsel

尚—selは—lingから転じて軽蔑の意を表わすこともある。

Geschreibsel Überbleibsel

例外として—salは数語だけ女性を—selは二語だけ男性を作っている。

die Drangsal die Mühsal der Häcksel der Stöpsel

## (4) Geの前綴を持つ名詞の大部分

Geの前綴は古高ドga, giはラテン語のcon, co, cumと同義であり、古くは語幹尾に—iをもったので幹母音は変音する。古高ドやラテン語に於いて共同・集合等を意味し、この原義が今日も保存されていて名詞に附加して団体集合等を表わす。

Gesetz (←Satz) Gestirn (←Stern) Geschwister

又動詞語幹に附加して行為の行動者、行為の結果、反復する行為等を表わす場合もある。

Gebräu (←brauen) Gewächs

Geの前綴であっても中性でないものもある。

der Geruch der Gebrauch die Gefahr die Gewalt

## (5) Geの前綴を持ちeの語尾を有し人間を意味しないもの。

それと同時に時間的連続または空間的集合を表わす名詞も中性名詞となる。

Gebirge (←Berg) Gebäude (←bauen) Geseufze (←seufzen) Gelübde (←geloben)

Gemälde (←malen)

これらの単語の中にはGeの前綴とdeの語尾を有するのが多数あり、受動の意味をもつものとして中性名詞となる。

## 3. 語意に依る性の見分け方

## (1) 国名・都市名の大部分

国名が国土を意味する（但し国民を意味するときは女性となる）といった形容詞のない場合には冠詞をつけぬ。

Deutschland Frankreich Berlin Rom

形容詞のある場合には冠詞とともに次の如く書き表わせるのである。

das schöne Japan das alte Rom

## das Deutschland von heute

例外として女性又は複数形や最近成立した国に男性名詞があり冠詞をつけて用いられる。

die Schweiz die Türkei die Niederlande die Tschechoslowakei

die Vereinigten staaten von Amerika der Pakistan der Irak der Iran

## (2) 動詞の不定形をそのまま名詞化したものの全部

Lachen (←lachen) Gehen (←gehen)

Hören (←hören) Essen (←essen)

Aufsichselbstangewiesensein (←auf sich selbst angewiesen sein)

## (3) 形容詞を名詞化したもの

Gute (←gut) Schlechte (←schlecht)

Grüne (←grün) Dunkel (←dunkel)

## (4) 名詞化した他の品詞及び文字

das Ich (←ich) das Selbst (←selbst) das Ach (←ach) das Nein (←nein)

das Aber (←aber) das Dasein (←daとseinの集合) das ABC

## (5) 文をそのまま名詞化したもの

Stell'dich ein 「密会」 (←Stell'dich ein !)

Rührmichnicht an 「ほうせん花」 (←Rühr mich nicht an!)

Vergiß meinnicht 「忘れな草」 (←Vergiß mein nicht !)

## (6) 子供とか仔の意味を表わす名詞

Kind Lamm Kalb Junge

## (7) 男女両性を総称する種族名

特に動物には性別を無視した中性形の名詞が用いられる場合がよくある。

Rind Pferd Schwein Huhn Tier

## (8) 集合名詞の多くのもの

Geld Heer Vieh Volk Obst Kleid Getreide Futter

## (9) 抽象名詞の一部

Nützlich Gute Dunkel

## (10) 物質名詞の多くのもの

Harz Brot Öl Wasser Mehl Bier Blut Papier Glas

## (11) 金属名の多くのもの

Gold Silber Eisen Zinn Blei Erz

## (12) 叢生植物の名

Rohr Schilf Grass

## (13) 近代的な機関名の多くのもの

Auto Flugzeug Hotel Kino Theater Mikroskop Telephon Teleskop  
Orchester

## (14) 軽蔑を表わす名詞

自然性にかかわらず中性となる。

das Weib das Mensch (←本来「人間」というときは男性であるがここでは「卑しい女」の意である)

## (15) 性の一定しない名詞 (中性と女性又は男性)

das od. die Verderbnis das od. die Ersparnis das od. der Barometer  
das od. der Thermometer das od. der Münster das od. der Willkommen  
das od. der Szepter

#### 4. 外来語名詞における性の見分け方

## (1) —umに終る主として古典語系の名詞

Studium Museum Datum Individuum Jubiläum Publikum Morphiun

## (2) —al, —ilに終り人を意味せぬ名詞

Kapital Material Fossil Profil

(ただし人を表わすときは男性となる)

## (3) —ierに終って人を意味しない名詞

Quartier Klavier Metier Manier

## (4) 主としてイタリヤ語より由来しOに終る名詞

Kommando Motto Porto Echo Tempo

## (5) —mentに終る名詞

Fundament Element Parlament Regiment Apartment

## (6) —tumの語尾を有する名詞

Christentum Deutschtum Königtum Eigentum Heiligtum

例外としてはder Reichtumとder Irrtumの二つだけである。

## (7) —onに終る名詞の大部分

Ion Analogon Lexikon Meson Ozon Elekton

## (8) —maに終る名詞の大部分

Drama Komma

## (9) 外来の薬品名及び化学物質名

Oxygen Arsen Anilin Glykogen Benzol Karbol Vitamin Karbonat Opium  
Zelluloid



- (10) 近代外国語がドイツ語に取入れられる場合の性は次の規則による
- (A) 英語の名詞は普通性を有しないからドイツ語の相当語の性を取る。
- (イ) 例えばDockは独語のdas Beckenに相当するのでdas Dockとする。
- (ロ) Beefsteakは独語のdas Fleischに相当するのでdas Beefsteakとする。
- (B) フランス語の場合に於いては無生物の名詞が男性であっても中性となるのが普通である。
- Etui Portemonnaie Billet Portrait Café

### 参考文献

- (1) Fritz Tschirch: *Geschichte der deutschen Sprach*. (1966), Berlin.
- (2) H. Paul—E. Gierach: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. (1929), Halle.
- (3) Schulz Griesbach: *Grammatik der deutschen Sprache*. (1967), München.
- (4) Kaufmann Gerhard: *Grammatik der deutschen Grundwortarten*. (1967), München.
- (5) Brinkmann Hennig: *Die deutsche Sprache*. (1962), Düsseldorf.
- (6) Paul Hermann: *Deutsche Grammatik*. (1952), Halle.
- (7) 桜井和市: ドイツ広文典, 第三書房.
- (8) 田川基三: 田川ドイツ文法, 朝日出版社.
- (9) 藤田五郎: 新ドイツ語コース, 三修社.
- (10) 橋本文夫: 詳解ドイツ大文法, 三修社.